

1940

目次

序文	I-IV
第一段	心性にひそむ二つの軸 1
一、物と心	1
二、存在と表象	2
三、眞理性(「質料—形式」軸)	8
四、二つの相(「直観—概念」軸)	11
第二段	存在学の定礎 16
一、序奏	16
二、カント哲学『黄金の鍵』	27
三、カント哲学の体系的整備	86
四、易とカント哲学	90
第三段	存在学体系 101
第一部	先験的位置論 107
第一章	先験的位置図式(リーマン幾何学に依る)
第二章	先験的認識論(図式による)
第二部	存在学の原理論(図式による) 112
第三部	存在学的演繹論(図式による) 121
第一章	主観的演繹論(純粹言語系)
第二章	客観的演繹論(純粹自然科学系)

序文

「アレキサンダーの夢は、言語と文明とでしつかりと結ばれる世界的帝國の創建であつた。」其の願望は慄くも打挫かれ、次いで神の道ミチと御國とが据えられた。ルネツサンスはしかし此の様な体系をも更に粉々と打碎く。『ことば』は決して人類の終局的紐帶とはなり得ない。」と謂ふ悲観論が、一部理想主義者達の間に行はれてもゐる。永い接觸のうちに滲み出て何時知れず融け合ふ『民族の氣分』と謂ふ様なものに、かへつてお互を緊密に結び付ける素因がひそんでゐるのではなからうか。「カントからゲーテへ——論理より生へ。」等と人々も叫ぶ。然し信号灯は赤と出てゐる。如何なる権利に基づいて「カントから」と言ひ得るのか。

*

汚水のしたゝる裏街の土塀にも、苔の新緑がある。ふと眼を見張る様な其の美しさは、

しかし忍び強い日々の営為にひそむのだ。一瞥には手堅く粗暴な程の自然も、仄かに萌え出でては斯くも麗しい大氣を放散する。アランの感受も一度はカントの体系に粉々と打碎かれてをり、バレリーの『エトセトラ』の底には涙ぐまじき『数え挙げの骨組』が隠されてゐる。其處から滲み出てゐてはじめてあの美しきがあるのだ。かすかな心の趣きをも其の儘に打傳へる慇懃さ、それから良き注意力などと謂ふものは極めて望ましいに違ひないが、迫られない一元性は一應のものたるを出でない。如何に美しい結晶を成してゐたとて、惱みの深まりを有たぬものには尊さがないのである。特異兒童の絵画とか天才少女の作文などは、ときたま成人に見られない鋭き美を閃めかせはしても、眞に尊いもののみのも有ち得る磁味を打出すことは出来ない。脳髓の裏側にいつ迄も附着して離れない空虚な後味も、其のあたりに起因するものと思はれる。マチス・ピカソなどが、あの簡勁な色彩と変形とで優に造型美の深みをつたへ得るのは、幾度となき解体と積み換え、建直しを其の背景と有つからだ。

*

若人を遠く高く駆り立てる生命の漲りは、其處のみに閉ぢた思念の体系を峻拒しはするが、刃の匂にも凝らむとする者は、徒に波に弄れて果はいづくともなく霧散する砂鉄の運命に、強い戦慄を感じないであらうか。一度は火に燻られ、一度は鎚にたゞかれ、否幾度となく其の試鍊に耐えぬいて、無限の生命を内深く蓄へよう、と決意しないであらうか。

吾々は、先人達の残した巨大なる思惟体系に直面し、驚異し、動搖し、思索更に消化して、再び他の体系へと突進する。激しい戦だ、しかし又誇らかな凱歌でもある。其處に突入し、戦ひ抜き、血みどろの片股を引摺りながら、でもひるまずに靜謐な朝をひたぶるに切關かう。

*

樹の間を透す朝の陽射しが、結ばれ合つた玉と成つて流の面に其の影を落してゐる。其處には、生命の氣の凝つてせゝらぐ谷間があるのだ。かたわらの深きしげみに、白百合はゆらゆらと咲き匂ひ、鬨ひ疲れた両足を其の清流にひたしつゝゆるやかに山巒を這ひ登る朝もやにふと眼をそゞぐ時、赤松の幹はやわらかな感觸を新鮮な明暁におし当てる。すべては終りを告げた筈だ、しかし見よ、今こそ將に凡ゆるものが胎動への萌しを孕んで深く息づいてゐる。あてどのない意欲は不定芽の様にむくむくとめばえてくる。其れが眞午に榮え、午後を経て夜に長け、遂には朽ち果てるものとしても、其の様な見透しすらが何か先見の誇とでも言ふべきものを提えて、一つの内発をかき立てずにはおかない。けれども、此の朝へは、いとも激しき争鬪のあることが忘れられてはならない。エドムント・フツセルは、其の生涯を斯かる戦に捧げ盡して後、『純粹意識の領域』を獲取した。カントは、『純粹悟性概念』を、そして更に『先驗的自由』の領界を。吾々は此の様な領域をも突破し、より豊かな、より広き國土に、より輝かしい朝を迎へむと希ふ。先人達の朝は吾々の朝ではなく、生命のせゝらぎは更に『H₂Oの流動』ではない。其の靜謐に、其の清流を掬せよ！無機物の類たぐひですら科学を超えて谷川に神秘を注ぐ。あらゆる便法と人智とを超えた人類契

合の素地は、果して其のせゝらぎに求め得ないであらうか。

第一段 心性にひそむ二つの軸

一、物と心

自然への畏怖、天力に張り詰められた瞳、——其れは吹き荒ぶ風足を見つめ、深く裂罅^{ひび}の入った地面に吸ひ着けられる。だが、たゞの風足、たゞの地面は日常には嬉々たる木立でありゆたかな母の懐でもある。人間は其の様なものを見つめるのではない。其等のものは、其の際に何事をも語らず且語り得ない。貫いて其の底を流れる力、斯様な畏怖の情感を深く波打たしめる力、人間の心性と地面との縫合点をひたひたと押し流れる不可抗の力、其れが彼の亀裂と其れを見つめる者と共に滲透し、一つの機會に凝つて、『みつめ』そのものとなるのである。然し此の事は、見つめる者がたゞに現在の吾であり、見つめられるものが單に今在つて何時かは消え失せる亀裂であると謂ふ事を意味しはしない。問題は、其の様な外殻のみに関したことではないのだ。見つめる者と見つめられるものが、『みつめ』ると謂ふ固く喰ひ合った統合を見せながら、しかもあくまで、「見つめる者——見つめられるもの」として各自の地歩を譲らない所に存在過程の眞烈さも生れるのである。

二、存在と表象

やゝ数理的な面におもむくが、『点』と謂ふ概念に暫く思考を集中してみたい。『点』と謂ふものは分量的にのみ考へられることは恐らく不可能であり、其れは何等か関係的なものとして考へられなければならない。一つの線分に就いて見れば、其れの起点・終点・中間のいづれもの点、等として考へられる。然し乍ら其の様な『点』も其れの可能性に就いて全称的に考へられるならば、特定線分に閉じ込められると謂ふことはなく、かへつて斯くの如き特定線分を其れの一軌跡若しくは一偶有として限定する。他方此の様な『点』は、線分の側から考へられると、あらゆる可能性中特に斯かる特定様相に自己を限定せるもの——「実在を斯くあらしめるもの」——と見做される。比論的な表現であるが、アリストテレスは斯くの如き二側面よりして『点』の如き存在を『実体』と考へた。近世に於いて『点』と謂ふものを最も深く考へ、且つ神秘的とも思へる程に其れを高貴に輝かしめたライプニッツは、彼の思索が未だ熟さない時代に、「点の中に精神を配置」してゐる。上の様な場合に、『点』は線あつてはじめて其の起点、終点、又は中間点等として考へられ、其の時々又は場所々に自己の位置を有つのであるが、夫々の位置に於いてかへつて其の線分を位置づけ、線と謂ふ現実的存在様式に依存しつゝ同時に其の事自身に於いて依存対象を斯くの如き存在たらしめる。

吾々の或る先人は、不可知の実体を『ロゴス』と名付け、如何なるものであるかは知られないが、兎に角宇宙の規則的営為を掌る力であると考へ、最早其の由因を問ふことの出来ない初源の原理であるとした。其れは現実世界に於ける現象従りはじめて推理され得るものでありながら、実に斯様な現象を斯かるものたらしむる所以であると考へられた。現実が物のみの自存的状態ではなく、吾々に於ける物の受け取られ方である限りに於いて、其れは両つの方向を具体してゐる故に、吾々は其れに於いて初めて自己と外物及び外物相互・自己相互の間に行はれる規則的關係を意識し且認識し得るのであり、現象なき場合、『ロゴス』の如きは無意味でも不可能でもある。此の様に現象に就いてはじめて把握され其の存在を確認され得るのであるにも拘らず、然も現象をして斯くあらしめる所以のものと考へられる点に於いて、『ロゴス』は『点』と類似した性格を具へてゐる。『靈魂』は、歩く人・坐る人・吠える犬・走る犬など現実の存り方を通して其の現れる相を各々異にしながら常に其の底に横たはる同一の或者として考へられた。『個体』(基体)と謂ふのは、燃えたり・凍つたり・泣いたり・笑つたりなどしつゝも或同一性を保持する存在者の、統一的地盤として求められた極限概念である。其れ等はひとしく先に述べた『点』の様な性格を有つものとして『実体』と言はれる。アリストテレスは、「実体といふことは・・・少くとも四つの主要なる意味に於て云はれる。即ち、本質・普遍者・類・の各々が実体として考へられ、第四には基体が実体として考へられてゐる。」(形而上学・Z・三)と言つてゐるが、一、は『靈魂』、二、三、は『ロゴス』、四、は『個体』に当たる。吾々が此の章に於いて『実体』と謂ふことの追求を此の様に重視するのは、吾々の論究が一に「存在とは何ぞや」と謂ふ問題に向けられてをり、其處では存在と謂ふことが根底的且原理的に把握せられねばならないのであるが、「存在と云ふことは、多くの意味において云はれつゝ、然かもその本来の意味においては、云ふ迄もなく本質を云ふのであつて、それは即ち実体を意味する。」(形而上学・Z・一)のであり、「存在とは何ぞや」と謂ふ「昔も今も、また何時の時代においても提出せられ、常に疑問の對象である」問題は、「換言せば、実体とは何ぞやと云ふことに外ならぬ」(全)からである。

さて、『ロゴス』は元『ことば』を意味した。其れは人と人との關係を媒介するもの、と謂ふ意味からあらゆる存在者間の關係を言ひ表す様になり(例へば『比』、終に自存的な『關係自体』を意味する様にもなつた。其處では、「各々の者自身にとつて知られ得る以外にそれ自身に於ては殆んど知られ得ることのないものから出發し、其處から次第に進み行くことに依つて、直接それ自身に知られ得る所のものを認識する」(形而上学・Z・三)と謂ふアリストテレスの学問的方法が、自然の勢として行はれてゐる。『ロゴス』は漢字で現すと『理』の文字に当たり、両者は又極めて似通つた性格と運命とを有つのであるが、『理』は『すぢみち』などと訓み、二点間に引かれた一つの線分は源初的意味に於いて其れを表出する。而して『すぢみち』と言はれるときには、『すぢ付けるもの』と『すぢ付けられるもの』とが考へられ、其の故に一つの『すぢみち』である『道』は、或る場所より他の場所へ働く人間の意欲的行為に依つて説明せられる。其の様な行為の最もシムブルな類型を

求めるならば、食物が見付かつて「食べたい！」と謂ふ食本能の湧く場合が考へられる。其の食物と意欲主体とは、瞬間的に或仕方では結ばれ、其の際速度 (Speed) と謂ふ事が第一に閃いて時空の両は一と成り、結合の通路は即刻且最短距離に於いてびしつと頭に焼き付けられる。然し其の實行は、種々の制約に依つて、一定の時間と或空間的無駄とを踏んで為されねばならない。此の様な場合、『意欲と行動との一致』が眞の理想として高く掲げられる。支那に於いては、現実の『道』なり『理』なりが直観に於ける其れ自体に迄高められたとき、理論及び実践の最高なる理念を示す言葉となつた。其處に到る事情は又、『ロゴス』に於ける場合と略々同様であると考へてもよい。

此處に先づ存在者を知ること、次いで其の様な表象に於ける相関者としての『己れ自身』を知ること、更に存在者 (客体) 相互・自己相互・存在者及び自己の關係たる『ロゴス』を知ること、而して現実のそれと直観に於ける極限概念としてのそれとの關係を知ること、が人間の生活にとつて最も重要なこととなつてくる。此の事はしかし人間の思惟性を前提としてある。思惟は主体と外物との直接的な『ひづみ』から生ずるのではなく、主体内に於ける『感受性』(此處では狭く、即ち心理学で言はれる受容細胞羣より求心神莖系統及び其れの中核あたり迄を思ひうかべてみて欲しい)と『自發性』との間に於ける『ひづみ』であり、思惟が唯一つの相に止まるべきでない以上、其の『ひづみ』は安定であることは許されないから、一方に自己の同一性を保持しつゝ二者(『感受性』—『自發性』)のうちいづれかは變化に関與する者であらねばならない。日常の觀察に照らし、又單に其の名称に就いて見るも明らかな如く、『感受性』は正しく其の様なるものである。然らば、斯かる『感受性』Rezeptivitätと外物との直接的な『ひづみ』から生ずる感受内容即ち現象 Erscheinungと、既述の如き間接的『ひづみ』である思惟(デッカルトの用ひた様な幅広き意味に於いて)とは、一体如何なる關係を有ち、且其の各々は如何なる様相を有つのであらうか。

三、眞理性

新田義貞の場合を考へて見る。寄り集ふた機會と態勢とは、羣がる軍勢を矢継早に馴り立て、其の白熱せる尖端は今や流星の如く稻村ヶ崎に突入した。然し一步手前には、満々たる海水が溢えられてゐる。此處迄燃え熾つて来た焔を、此の『重大な接点』でかき消さねばならないのか。・・・義貞はすつくと立ち上り、個々の者を燃し續けてゐる焔を嚴かに『黄金の太刀』に移し採つた。全軍が、彼の手に捧げられた太刀をふと仰ぎ視た時、其の心内に燃えさかる焔を其の儘其處に見出したのである。太刀は海中にはつしと投げ入れられる。引續いて起つた干潮(ひしほ)の現象は、太刀の魔力否兵達の偉力其物の外部的障阻に對する高き勝利を象徴した。徐々に退き行く潮足を辿りながら、將兵は心の内に敵軍の敗退をすらも描き出したに相違ない。時間の空白と行動の滯澁に伴ひ勝なあらゆる不利が、其處ではかへつて高らかな進軍の譜に変へられたのである。

自然の現象を、彼の太刀の故にすると謂ふことは確に一つの迷蒙であらう。けれども、

自然現象と太刀にこめられた氣蘊との深い契合が生み出す一つの感情、其れと其處より興るべき兵達の逞しき思念、などに義貞が視点を据えてゐたものとすれば、実に深い眞理が彼に依つて示されたのである。眞理性は、存在者（広義——主観・客観等の視方向を撤回した場合を考へて欲しい）相互に於ける『ロゴス』性の判明な把握に存する。其れ故又認識論的に言へば、眞理性は外物（超越者）と感受性、感受内容と其れの統一の先驗意識、と謂ふ二つの基本的関係類型に就いて問はるべきものでなければならぬ。吾々は一見類別的な斯かる二つの関係型を、人間の心内深く隠された一つの軸を以て貫き、其れを「質料——形式」軸と名付けた。心性に關して変化しないもの、即『自發性』の根柢を成す理念的『純粹我』とも言ふべきものは『形式』の極点に考へられ、『感受性』に對峙し、其れと『ひびみ』をなして感受内容となるべき『先驗的對象』（物自体）は『質料』の極点に考へられる。此の事は「眞理とは何ぞや」と謂ふ古い有名な問題を解決せんが爲め基礎的手續に屬するのである。「此の場合に、眞理性とは認識とその對象との一致である、といふ名称の説明は許容され前提されて居るが、人々の知らんと欲するのは個々の認識の眞理性の一般的にして確實なる徴表はなんであるか、といふ事である。」(Kant, K.d.r.V. B.82)

四、二つの相

最後に、右と同様な使命を有つ他の一つの軸——「直観——概念」軸（又は「ノエシス——ノエマ」軸）——が如何様な性格を有ち、如何なる姿をとつて現れるかと謂ふことに就いて述べよう。

問題の性質上、近代の文明社会に於いて最も緊迫した要求をもち、且心性の深みに觸れる『精神病療法』に就いて考へて見たい。即ち、分析的とも言ふべき療治の方法が近頃にとつて著しく發達せしめられたが、其れは療治のあらゆる可能性を患者の特性的機能に分け入つて詳細に調べ挙げ、其處に見出だされた主要要素を他の總てを投げうつても注目すると謂ふ方法を採用。重要な事は、斯様な方法に於いて指摘され得るものが顕著なるものゝみに限られねばならないのに反して、精神の秘密は寧ろ極めて顕著ならざる・底深く隠された・微妙な面にひそんでゐる、と謂ふことである。『数え挙げ』は、如何程精妙に行はれても完全さを盡くす事が出来ない。難点は、(一)『数え挙げ』と謂ふものは極めて危つかしい。(二) 数え得るものが眞の根であることは恐らく稀である、(三) 其の事への信仰は根を失つた生命体をつくる、(四) 然も其れを『数え直し』で補はねばならない、等である。科学信仰時代は、恰も此の様な悲劇を孕んでゐる。其れは十重二十重に覆はれた、剥ぎ取り難い蒙昧である。ばらばらに矯正するのではなしに、人間の心意と謂ふものは根こそぎにニぶり起さねばならない。姿を取つて現れ得るものは、吾々の内に入來つて結ぶ像にこそ其の根柢に存するものを指示する。「一人の人間の性格を描き出さうとしても無駄である。むしろそれよりはその人の行爲と行動をそのまゝに取り出して見るがよい。さうすれば彼の性格の形像が現はれて來るであらう。」(ゲーテ)それで、療治などに就いて言へ

ば、此の様な像を一つの頂点にぐつと引き絞つたまゝ、或目標に力強く導いて行く時に、成果は根柢的なものと成つて現れる。其の場合、分析的な個々の要素は、其の事に於いて脱皮し轉生するのである。総合的又は修養的とも言はるべき斯様な方式は、最近殊に日本の精神病学界に於いて注目せられ且実践せられてゐる。

斯くの如き二つの對立的方式は、あらゆる他の生活領域に於いても指摘することが出来るが、科学万能と宗教的信仰、理論主義と実践主義、等は殊に顕著な類型であらう。前者は実行に先立つて行為の可能性を分析する。其の際、整合の為に無理と『切捨て』とが行はれ、可能要素をなす種々の能力集團が夫々訊問せられるにつれて各自は孤立的となり、渾然の力は抜き去られ、意力の稀薄化は統一を破局におとし入れる。幾重にも偏頗にされた後に生れる理論は、当然適確なものではあり得ない。之に反して後者は、直覺的に定められた視点にぐつと全体を持ち上げ、ぐんぐんと其處へ力を加へる。諸機能を統べる大綱が一点にしっかりと結び付けられてゐるので、巨大な力と沸騰する血汐とがあらゆるものを其れへ向けて熔融する。敢然たる信頼と万策を盡くしても剥ぐことの出来ない意力とは、一瞥の不可能をすべて解決する。「雨滴も巖を貫く」と謂ふのが、其處での標語である。一つ一つの雨滴には、如何様な分析と計算とを加へても、其れだけの力は見出だし難い。然し其れにも拘らず、其の内には斯くも大きな仕事が確実にひそんでゐるのである。一見では摘發され得ない能力が此の様な実現を示すのだ。「お前は最う駄目だ。」と医者に宣告された病人が、猛然となけなしの余力を精神療法に投げ盡して遂に全回した、と謂ふ様な例はいくらでもある。通常の医者では、到底斯かる余力を洞視することは出来ない。又医者達は、時間ぎめの保乳を奨めるが、母の愛情は規則を超えた規則をたゞへてゐるものである。其のまめやかな氣配りにこそ嬰兒の發育には最も適切な規則が営まれてゐるのである。前章に述べた「質料——形式」軸が、其の両端に『多神教』と『一神教』とを生みつけるものとすれば、此處に述べた様な「直観——概念」（又は「ノエシス——ノエマ」）軸は、其の両端に『啓示宗教』と『自然宗教』へ又は辨證法的と言はれるヘーゲル流の發展様式を思ひ浮べるならば、其れの完成形態としての『理神論』乃至『汎神論』、佛教に就いて言ふならば浄土門と聖道門、と謂ふ神的存在者に對する両つの態度を生ずるものと思はれる。人類と宗教とが如何に切離し難きものであり、野蛮の民・文明の民・あらゆる氣候帯を通じての人類・を一貫して上に述べた様な宗教のいづれか——例へ典型的に截然と別ち得るものとしてではなくとも——常に存在すると謂ふ事實は、此の二つの軸が人間の心性に於いて如何に必然なものであり、且如何に主要性を成すものであるか、と謂ふ事の明確な證左と成るであらう。吾々の如く理論的体系を目指す者は、『アテナイ製』の『理性の秤』ではかり得ないものは、『エルサレム製』の『ヨブの秤』ではかり得ない。「二」は筆者の記入」と謂ふ非合理主義者シエストフの実存的思惟を特に此の章に聯関して深く汲み取らねばならない。

第二段 存在学の定礎

一、序奏

吾々は、第一段に於いて存在と謂ふものを種々の側面から考察した結果、其れを貫く二つの軸を極荒削りにではあるが取出すことが出来た。然し乍ら、其れには掘りたての鉱石の様に、土も附いてをり有害な不純物も混じつてゐる。其の様な生の自然性（なま）と謂ふものは、理論の根柢に缺く可からざるものではあるが、洗滌と精鍊とにこそ学問の使命乃至本義が課せられてゐる。其れ等のものを理論的判明さに於いて把握し、存在学構成の骨組にもなさうと考へる吾々は、此の二つの軸が果して其の様な任に耐え得るか否か、其の数は必然であるか、如何にして其れは斯かる体系を構成し得るか、等の問題提出を通じて学の定礎を行はなければならない。其の事は、然し乍ら浅学な一思索者にとつて勝ち過ぎた負擔である。吾々は其の故に、歴史上の種々な時代又は異つた國々に於ける偉大な観想者達の助力を得て、一面には理論に普遍性を他面には其れの嚴密性を期すべきであらう。其れ等の手續は、広範に亙り過ぎたり哲学史の隅々に迄眼を配ると謂ふ様な事であつては、繁雜なばかりで有益な成果はおさめ難いから、人類史上に高く聳ゆる二つの峰を選び、其處を據点として其等を取巻く連山を一望の中におさめつゝ考察を進めたい。

二つの峰とは、頂点を孔子及びカントに有つ東西の両思索体系を指す。

孔子を頂点とすと言つても論語を中心とした儒教思想のみを意味するのではなく、寧ろ伏羲に興り文王・周公に於いて完成し孔子に於いて其の哲理を深められ、又何等かの仕方（かた）で儒教・道教をはじめ諸子百家にも取入れられて支那思想全般に滲透し、他方には民族一般に於ける慣習要素と迄成つた『易』の思想を言ふのである。其れは実に東洋史を貫く巨大な体系——民族の血汐が昇華して生み出した靈妙な結晶——である。古へ伏羲が天下に王と爲り、仰いで天文を觀俯して地理を察し、此處にはじめて八卦を畫し、文王は彖辞周公は爻辞を作り、次いで孔子は十翼を作つたと言ひ傳へられる。上古に在つては伏羲、中古には文王・周公、近古に在つては孔子、故に漢書は藝文志に「人は三聖を更へ、世は三古を歴たり。」と稱する。孔子は又、匡の災厄に際して、「文王没したれども、文茲（ここ）にあらずや。」と絶叫し、ゲッセマネに於けるイエスの祈禱にも似た其の必迫せる言々に、彼の心奥深く秘められた使命感を吐露してゐる。兎に角、周子・二程子・朱子等支那思想の大成者たる宋学の大家及び江戸時代の日本儒家達が、如何に易の思想に関心を有ち且有たねばならなかつたか、陰陽五行の説が如何程に支那及び日本の習俗を支配したか、等と謂ふことを考へ合せるならば、易の思想が東洋的基調に於いて構成された一大思索体系として、又羣山を抜いて聳ゆる一鋭峰として、吾々の論究據点たり得ることが確認せられるであらう。

他方カント哲学は、近世のもたらした最高にして最大なる思索的收穫であり、且ヨーロッパ民族の有した全哲学系列の完成体系でもある。彼の後にはフィヒテ・シェリング・殊

にヘーゲルと謂ふ偉大な体系家達が出てをり、ヘーゲルの体系こそは正に吾々の目標に適ふものではないか、と考へられる節もあるが、彼の莊麗な建築物に對しては、寧ろ藝術的側面より深き偉敬の念を捧げるに止めたい。既に嚴正なる科学の熔爐を経來つた筈の十九世紀哲学としては、『熱狂せる構想力』の産物乃至学問的嚴密性を缺くものと謂ふ類の正当なる非難に對して、何等の回答をも保持してゐないかに思はれる。ヘーゲルは、其の青年時代を歴史及び神学の研究に捧げ、其の頃より民族的情熱に溢れてもゐた。其れに對してカントは、未だ成長しない理性を、假象の世界に遊ばしめることを禁じて、自然科学的探究に沈潜した青年でもあつたし、又生涯コスモポリタンとしての自覺を失はなかつた普遍的精神を有つ哲人でもあつた。「カントは永遠なるものに對する澄んだ、激情なき眼を有する。彼は彼以前以後の偉大なる体系建設家達の中に於いては恰も、酔へるものの中に於ける醒めたるものの如くである。」(N・ハルトマン)「フィヒテの「知識学」に對しては既にカント自身「かゝる学が果してどれ程の利益を齎すかは殆んど期待できない。」(一七九七・四・五・ティフトルンク宛書簡)と言つてゐる様に、不整合なる批判哲学を体系的完成にもたらさんとした彼の壮大な意図も、極端なる觀念論的一面性の故に否定されねばならない。ドイツ觀念論者達の驚異的体系羣は、批判的諸業績に於いて完遂せられた形而上学の定礎(学として現れ得べきあらゆる將來の形而上学の『予備学』)に其の盡きせぬ源泉を有つものではあるが、其の後此等の体系羣に對する不信と諸学派の低迷混乱とが期せずして「カントへ帰れ」の声を生んだと謂ふ事實は、未だ其等に依つてカントの体系が充分には汲み盡くされてゐなかつたこと、否寧ろ歪曲して成長せしめられてゐたことを、他方には、カント哲学の探究指標にこそ眞に求めらるべき哲学の本質が存するのではないかと謂ふことを指示する。十九世紀後半より今日に至るバーデン・マーブルヒ両学派及び現象学派(何等かの仕方では對象論とも交錯する)の輝かしき業績、殊にコーヘン・フッセル等の嚴密なる学的体系、ハイデッガーの豊かな構想、は広い河幅と成つてカント哲学に朝宗するのである(バーデン学派のヴェンデルバント・リッケルト及びマーブルヒ学派のコーヘン・ナトルプ等は彼等の屬する学派が「新カント派」と總称される点からしてもカント哲学の後継たることは直ちに承認されるであらうが、フッセル及びハイデッガーに就いては其の主義上からも多々の異論が予想せられる。然し乍ら、フッセルの名著「純粹現象学及び現象学的哲学の理念」には「假令カントは猶ほ未だ此の分野を奪取するを得ず、且つ又それを獨自の嚴密なる本質学の研究分野として認めるを得なかつたとはいへ、彼の心眼は此の分野を凝視してゐたといふ事が明證的となる。それ故、例へば純粹理性批判第一版の先驗的演繹論は、本来既に現象学的地盤の上に展開されてゐる。」(第二篇・第四章・六二)と謂ふ言葉があり、又リッケルト「認識論」・フッセル「現象学」の探究を経て獨自の存在論を打ち立てたハイデッガーは、其の著「カントと形而上学」が体系第二部をなすとも言はれてゐる程にカントを深く汲み取つてゐる)。然し批判体系は如何にして其の様な深さと広さとを得來つたのであらうか。カントの定礎が其の様に確固たり普遍的たり得る所以はいづくに、存するのであらうか。

青年期に於けるカントの明星は、ニュートン及びライプニッツであつた。「運動及び静止の新たな学説」と謂ふ論文に一應の終結を見せる当時の思索は、ベーコン・ガリレイに興つてニュートン・ライプニッツに極盛を誇つた新興思想に集注せられる。其處では、經驗の地盤から飛び去ることを許さない厳格な悟性の訓練が行はれ、其れに伴つてルネッサンスに波打ちはじめた新思想の動向が幅広く受け容れられた。ニュートンはガリレイを徹底せしめ、ベーコンの理論を實踐に依つて充実し、完全な自然哲学の体系を提出する。ライプニッツは既に幼少の頃よりスコラの教養と新興科学思想とのギャップに悩み、如何にかして両者を統一せんものと思案に思索を重ねた結果、有限な經驗的存在にひそむ無限の先天性乃至神性・宇宙性を對應及び表出の思想に於いてとらへ、微分概念に依る記号的把握を経て「形而上学敍説」・「單子論」の如き先天論的存在学の構想を展開した。ルッソー・ロック・ヒューム等に依る著しき思念の動搖は、遂にカントを導いて批判的方法（「可感界並に可感界の形式と原理」）の確立、續く十余年の沈黙の後「純粹理性批判」の大成に迄至らしめたが、其の体系の中にはニュートン・ライプニッツの業績が批判的に嚴正な形で太く織り込まれたのである。「純粹理性批判」がニュートン物理学の基礎づけであるとは一般に言はれてゐることであるが、「かゝる（批判哲学の）研究が假令数学に新生面を與へ得ないにせよ、然し逆に数学は其方法及び發見の原理を、これに附随せる要求並に缺陷とともに省察して、純粹理性の批判並に測定に新機軸を出し得るしまた純粹理性に其の抽象的概念を表現すべき新しい手段すらも、つまりライプニッツの『普遍的記号の組合せ法』に類似せるものすらも與へ得るものであるといふ期待を全然棄ててはゐません。」（一七九一・九・二七・ベック宛書簡）と謂ふカント自身の言葉は、斯の有名な範疇表及び其れを骨子とした理念表等と思ひ合はされるならば、ライプニッツの所謂『普遍的数学』の理念も其の『多様における統一』の思想（「悟性新論」及び「單子論」）と共に如何程彼の主著を支配してゐたかを察知せしめる。又近世哲学の開拓者であるデッサカルト及び其の一つの土地を耕したものと云はれるスピノザも忘れられてはゐない。彼が、「最大のしかし望むらくは無益ならざる、労苦を要した」（第一版序言）と言ふ「純粹悟性概念の先驗的演繹」は、「一方面は純粹悟性の對象に關係し、．．．他方面は、純粹悟性自身をその可能性と純粹悟性そのものゝ根柢を成す認識力とに關して」考察したものであるが、其處では、彼のデッサカルトが極みなき懷疑試行の極点に於いて到達し得た「我思ふ」が、統覚の先驗的機能として「凡ての悟性使用の最高原則」（B.137）とせられ、「思惟と延長との對立に於ける統一」の提問も亦歴史的な解答を得てゐる。「物の秩序及び連結は觀念の秩序及び連結と同一である。」（エチカ・第二部・定理七）故に觀念と物とは永遠に分れてゐるが、併しそれ等の關係法則は同一である、と謂ふスピノザの存在論も此處に根柢的なる基礎づけを見出すであらう。然も又先驗的論理学は、アリストテレスに於いて略々完成の域に達しスコラ哲学に依つて徹底せしめられた形式論理学に深い根柢を有することが、純粹悟性概念の形而上的演繹と言はれてゐる部分に依つて知られる。彼が「体系的位論」と稱し批判哲学の礎石ともなした範疇表が、形式論理学の判断様式を体系的に構成することから得られたと謂

ふ事實は、將に其の事を指示してゐるのである。「純粹悟性概念は、上に掲げた表に於てあらゆる可能的判断の論理的機能があつた数丈け發現する、・・・吾々はこれ等の概念をアリストテレスに倣つて範疇と名づけようと思ふ、といふのは吾々の意図はその実現に於てアリストテレスのそれとは全く遠ざかつたけれども本来は一様であるから。」(B.105)形式論理学と『十範疇』とは其儘の形に於いては拒否されつゝも、原理的な深さと広さを加へて彼の哲学体系の中に蘇生せしめられたのである。斯くの如き論究は、カント哲学をして西方思想の焦点的位置たらしむるに何等の躊躇をも與へないと考へる。

吾々が学の定礎に於ける理論的手續の據点として選んだ斯かる両思想系統は、一は孔子の著と傳へられる「十翼」、他はカント哲学の基礎理論を展開する「純粹理性批判」に於いて体系づけられ且理論的嚴正さを確保するのであるが、前者は東洋思潮一般の特性を反映して、直観性には深いが所謂科学的論證性に缺くる所がある。其れに反して後者は、直接に雄大なる藝術的構想をうつたへはしないが、確實に一歩々々礎石を築き上げて行くと謂ふ点で、理性の高揚には未だ日の浅い吾々にとつて最初の據点ともなり得るのである。斯くて後のものに依り理論的に精鍊せられた彼の二つの軸は、民族性・風土・思念類型等著しく異にし、寧ろ對極的とも考へられる地盤で形成せられた理論体系の試鍊に、果して如何程迄耐え得るか、其等の軸は其處に於いても亦体系の基本的骨組たり得るか、等の提問を経て、定礎の普遍性と嚴密性とに極みなき確信乃至證言を與へるであらう。

四、易とカント哲学

(イ) 八卦図と『先驗的位置論』

此處に八卦図と言ふのは、世に伏羲の先天図と称せられてゐる有名な図式を指す。周子の「通書」に記されてゐる「聖人の精は卦を畫して以て示され、聖人の蘊は、卦に因つて以て發せらる。卦畫されざれば、聖人の精は得て見る可からず。卦微なかつせば、聖人の蘊は殆んど悉くは得て聞く可からず。易は何ぞ止たに五經の源のみならんや。其れ天地鬼神の奧か。」(精蘊第三十)と謂ふ言葉を省み、「十翼」の「繫辭上傳」に書かれてゐる、「聖人象を立てて以て意を盡し、卦を繋けて以て情偽を盡し、辞を繋けて以て其の言を盡し、變じて之を通じて以て利を盡し、之を鼓し之を舞し以て神を盡す。」と謂ふ言葉を味ふならば、其れが恰もカントの言ふ、「人間の心の深みに於ける隠れたる術」としての純粹図式であると謂ふことが推測せられるであらう。其れは「時あつて我々がその眞の二つを自然から学び得て之を赤裸々の姿に於て示すことは容易な業ではない。」(B.180)「古者包犧氏の天下に王たるや、仰いでは則ち象を天に觀、俯しては則ち法を地に觀、鳥獸の文と地の宜とを觀、近くは諸これを身に取り、遠くは諸を物に取る。是に始めて八卦を作り、以て神明の徳を通じて、以て萬物の情を類す。」(繫辭下傳第二章)八卦図は次の如く畫される。

【図1】

吾々は二、に於いて位置論の図式的形成に就いて論じたが、右の図式と位置論的図式とは如何様な聯関を示し、且位置論の二軸たる「質料——形式」、「直観——概念」は如何なる姿で此の中にひそんであるであらうか。これ等の事を前章に掲げた先験的位置論の各項を通じて説明して行かう。

(一) 先験的論理学

第二段、二、に於いて攻究した図式的手續に依り、吾々は前章に於いて分類した此の標題の部門を、カントの用法に従つて次の如く図式化することが出来る。

【図 2】

Materie, Form, Umfassung は、就職論文第一章第二節から採られ、カントのあらゆる基本的處理に適應せしめられてゐる。

吾々は、「十翼」中の次の如き文章を基として、右と類比的な図式を作ることが出来る。

1. 生々之を易といふ。[Umfassung]

易は思ふこと无きなり、爲すこと无きなり。寂然として動かず、感じて遂に天下の故に通ず。

2. 天は尊く地は卑くして、乾坤定まる。卑高以て陳なりて、貴賤位す。[Form]——[Materie] 動靜常有りて、剛柔断る。[Noesis]——[Noema]

方は類を以て聚り、物は羣を以て分れて、吉凶生ず。(Analyse a priori)——(empirische Analyse)

天に在りては象を成し、地に在りては形を成して変化見る。(Synthesis a priori)——(empirische Synthesis)

3. 乾坤は其れ易の縉か。乾坤列を成して、易其の中に立つ。

乾坤毀るときは則ち以て易を見ること無し。易見るべからざるときは、則ち乾坤或は息むに幾し。

4. 是の故に形而上者 [Form] 之を道と謂ひ、形而下者 [Materie] 之を器と謂ふ。

【図 3】

(二) 内在的位置論

此の章も既述の處理法及び (一) の図式化を土台として次の如く図式化され得る。

【図 4】

「十翼」中の次の言葉は右と類比的な図を構成する。

1. 易は思ふこと无きなり。寂然として動かず、感じて遂に天下の故に通ず。(A) (ハイデッガーに依れば、現存在 Dasein は「気分」に於いて顕示されると言ふ。「気分はそのつど既に世界——内——存在を全体的に開示し、……への転向を可能ならしめる。)(Sein und Zeit. 138) (B) (此の項は、「(一) B.155 の註」に對應する。)

2. 易に太極あり。是兩儀を生ず。兩儀は四象を生じ、四象は八卦を生ず。

易に四象有るは示す所以なり。易とは象なり。象とは像なり。象は図式に当る。四象とは、老陽(☰)少陽(☱)少陰(☷)老陰(☶)であり、金文等に就いて其の変遷を辿れば、
=なる陽の符号は○より轉化したものゝ如く、即ち円転性・連続性を現すのに反し、=なる陰の符号は折断性・不連続性を現す。=は時間持續(總括と謂ふ語は感心できない)、=は時間内容、=は時間順序、=は時間項に相等する。)

3. 八卦列を成して象其の中に在り。

天地位を定め、山澤氣を通じ、雷風相薄り、水火射はずして、八卦相錯はる。

4. 乾道は男を成し、坤道は女を成す。「Spontaneität—Rezeptivität」

【図5】

(三) 超越的位置論

此の章は次の如く図式化される。

【図6】

右の図式に於いて明きらかな様に、反省概念の極限概念たる無の概念は多義的であり、しかも其れがカントの物自体説と相覆ふことに依つて、物自体の多義性を惹起してゐる。「カント学徒の苦難の範例(exemplum rucis)」とも云はれる物自体の把握し難き所以は其處にも存するのであるが、第二段、二の「無の概念表」に就いて述べた個所で行つた反省概念との聯関的處理法及び先驗的論理図式を土台とせる右図などを考量せば、先驗的對象の意義に用ひられる場合それはギリシヤ的表現における(之は高坂正顕氏の御意見である)『質料の質料』であり、可想体の意義に用ひられる場合は『形式の形式』である。カントは、經驗的体系の彼岸には「唯虚空のみがあつて吾々は夫を直観によつても、又概念によつても充すことは出来ない。」と言つてゐるが、『無』といふものは一つの極限概念として深い思辨からは切離し難きものであり、又此の『無』の有つ夫々の性格こそ其の哲学の礎石となり本質をもなすのである。カントの用ひた意味において其れは『限界概念』とも云はれ、決して消極的なるに止まらず、常に何等かの積極性を以て思索を統一し發展させる。其の様な『無』の概念の性格からして、易の体系に於いても斯かる概念が或本質的役割を演じてゐるのを見る事が出来る。

【図7】

アリストテレスに於いて原本的存在者は⊙⊙⊙⊙⊙(実体)として会得されてゐたが、此の語は本来「現存」即ち直接に且つ常に現前的な「所有」を意味するものと言はれてゐる。此の様に原本的存在者としての『太極』も、本体概念として『理』と同一的に解される場合もあるが、「生々之を易といふ。一易は思ふこと无きなり。寂然として動かず、感じて遂に天下の故に通ず。一一易に太極あり。」と謂ふ一連の思想を辿る時、「そのつど既に世界―内―存在を全体的に開示」(前掲)すると言はれる「氣分的現存在」の側面をも有つものと思はれる。斯様な『太極』概念の多義性は、周濂溪の著名な「太極図説」に於いて最もよくうかゞはれると思ふ。太極図とは次の如きものであり、

【図8】

朱子の「太極図解」には、最上の○が「無極而太極」、=は○の動いて陽、靜にして陰なるものであり、「中の○は其の本体」であると言はれてゐる。又朱子は「無極而太極」に註して、「上天の載こまは聲もなく臭も無し。而も実に造化の枢紐にして品彙の根柢也。」と言つてゐる如く、太極には nihil privativum, nihil negativum の如き意義があると共に、第二段目の図に見る如く、其れが木火土金水の五行順序の本体と考へられる場合には、ens rationis と同様な意義を有たされる。「氣は大虚に塊然として升降飛揚し、未だ嘗て止息せず。」(正蒙・太和篇第一・六)「太虚にして形無きは、氣の本体なり。」(企・二)等と謂ふ言葉を考量せば、氣と太虚との関係は略々推察されるであらう。

(ロ) 易と『存在学原理論』

ヘーゲルも其の哲学史に於いて易經の原理論的性格を指摘し、其處に於いては最も普遍的なる根本概念もしくは範疇及び形象が述べられてゐる、と言つてゐる。其の様に易は日常雑事の吉凶を占ふにも用ひられる他面、高き原理性を保持してゐるのである。カント哲学を基調とした『存在学原理論』と易との関係に就いては、次の如き各項に互つて論究をすゝめたいが、其れは別紙の図式に就いて其の紙上で行はれる方が、繁雜さも避けられ、明證性も得られる事と思ふから、此處では項目を羅列するに止める。

1. 西洋哲学の最初の芽ざしである古代宇宙論者と易の見解の類似性。(殊にエムペドクレスに就いて)
2. 西洋哲学の創始的完成者たるアリストテレスの範疇的思惟と易に於ける八卦。
3. 近世哲学の始祖デッサカルトの偉大なる後継者であるライプニッツの『普遍的記号の結合せ法』と筮法。
〔「結合法」の理念は、ライプニッツの生涯を導いた。それは彼の思索の出発点であり、遂に到ることの出来なかつた目的地であつた。〕
4. 以上の如き傳統を有つ西洋哲学の、近世に於ける完成者カントの範疇的―普遍的思惟と易經の原理論的性格。

第三段 存在学体系

荊は取除かれ、地平は打固められた。今や吾々の体系建築が始まるのである。

第一部 先驗的位置論

第一章 先驗的位置図式(リーマン幾何学に依る)

第二章 先驗的認識論(図式に依る)

- 第一節 先驗的主観論 (附・時空論)
- 世界観の主観的形成 (性格論)
- 第二節 超越的客観論
- 世界観の客観的形成 (表現論)
- 第二部 存在学的原理論
- 第一章 存在学的原理図式
- 第一節 多様の総合的統一 (は存在学の基礎概念たること)
 - (一) 初期宇宙論者達の理念
 - (二) プラトーンの「自」「他」
 - (三) アリストテレス・スコラの「形相」「質料」
 - (四) ライプニッツに於ける確立
 - (五) カントの完成 (先天的総合判断)
 - (六) 朱子学の理氣二元論
 - (七) 西田哲学の多即一
- 第二節 多様の総合的統一と『トポロジ』
 - (一) ライプニッツと『トポロジ』
 - (二) リーマンの純粹数学的手續
 - (三) ポアンカレの感覚論的解釈
 - (四) 『トポロジ』の精神科学への近親性 (心理学に於ける採用)
 - (五) 田辺博士の表象規定 (「直観は、異質的多様の内面的統一の連續的無限發展である。」)と、『トポロジ』の空間規定 (空間は如何なる数量的規定からも離脱せられた点の多次元連續体系である)
- 第三節 存在学的原理図式と『トポロジ』に於ける『座標』・『ベクトル』・『領域』の概念
- 第二章 存在学的原理論
- 第一節 範疇論
- 第二節 存在学的位置論
 - 〔Ⅰ〕 表象一般の区分論
 - 〔Ⅱ〕 存在各論
 - (イ) 個体存在論 (身体性の探究)
 - (ロ) 社会存在論 (実存性の探究)
 - (ハ) 超越的存在論 (精神性の探究)
- 第三部 存在学的演繹論
- 第一章 主観的演繹論 (純粹言語系)

されるとき、其の内容的多様を収覧し統一する時間的持續が考へられる。多様への関與を觸發乃至意識現象といふならば、持續性への関與は概観 (Synopsis) とも云はれ得よう。吾々は紋上の原理にもとずいて別紙第一図及第二図を制作することができる。

Kyoto University

いま、数学ではよく知られてゐながら哲学では殆んど使はれてゐない一つのことを哲学に關聯させて考察しようと思ふ。」と述べてゐるが、彼は、ライプニッツが微分概念に依つて「單子論」及び「形而上学敍説」の基礎概念を把握した様に、此の論文に於て『先天的綜合判断』の原理を記号的に把握してゐる。あらゆる側面に於て有限性に纏綿せられる吾々人間は、認識の最高部門に於てすら對象の現象性を其の明證的基礎として要求する。言語・數・図式等は此の意味で常に人間的思惟を確固たり透徹たらしむるに役立つてゐるが、「哲學者に三角形といふ概念を與へ、三角形の角の和が直角に對して如何なる關係にあるだらうかを、かれの仕方で見せしめよ、そこで彼の有するのは三直線によつて囲まれた一つの図形といふ概念と、この図形における同じ數の角といふ概念だけである。この概念についてどれほど熟慮しようとも、彼は何等の新しきものをも導出せぬであらう。直線・角或は三といふ數の概念を分析し判明ならしめることはできても、これ等の概念に於て全然ふくまれて居らぬ新しき性質へ到達することはできぬ。然しながら幾何學者がこの問題を取り扱ふとせよ。彼は直ちに一つの三角形を構成することに取らる。彼は推理の連鎖によつて、しかも常に直觀に導かれて、問題の全く明瞭にして普遍的なる解決へ到達する。」(B744f)と云はれる時、孔子が、「書は言を盡さず、言は意を盡さずと。然らば則ち聖人の意は、其れ見るべからざるか。」と謂ふ自問に對して、「聖人象を立てて以て意を盡し、卦を設けて以て情偽を盡し、辭を繋げて以て其の言を盡し、變じて之を通じ以て利を盡し、之を鼓して之を舞し以て神を盡す。」(繫辭上傳・第十二章)と自答する時、視象的環元が、あらゆる認識にとつて如何に重要なことであるかが、東西の代表的哲人に依り、等しく強調せられてゐるのである。表象の構造と其れの複雑なる機能とを空間に於て視象化し、且其の視象化されたものに自己の原理を與へる爲には、表象の構造を空間の原理に從つて再構成しなければならぬ。幾何學は數千年の歴史の中に、空間的原理の深みを驚くべき明晰さを以て照し出した。其の最も發展せる形式は、再構成に於ける樑木を選び取るに何等のチューチヨナカシメル勿論それは比論的のみに可能なのであるが、此の様にして構成された視象的体系は、空間的原理にも亦比論的に從ふことが許される。幾何學の前提が空間であるのに對し存在學の前提は存在乃至表象一般であるから。

既に述べた所に從つて、吾々は表象一般を質点の二次元的連續体系として規定することが出来る。今かゝる表象平面に直交座標系(「質料——形相」 \parallel 「 x —— x 」・「 y —— y 」)を想像せば、一点A(左図参照)には其の直交座標 (x,y) が對應する。かゝる表象空間において一つのベクトルを考へるとき、それは一つの有向線分 PQ で表される。平行移動に依つて PQ と重ね合し得る一羣の有向線分は、何れも PQ と同一のベクトルを表す。之等の有向線分と同じ向きをもち同じ長さを有つた有向線分 OA を座標の原点 O を通つて引けば A は定点となる。即ち一つのベクトルが與へられるとき、之によつて点 A が定まる。

【図 9】 Fig. 1

次にベクトル OA を A で表し、其の成分へ A 点の座標 (x,y) として此の事実を $A(x,y)$

と書表し、同様にベクトル \overrightarrow{OB} を B で表し、其の成分を $(-x, y)$ として $B(-x, y)$ と書表せば、ベクトル A とベクトル B との和は、「ベクトル $A(x, y)$ 及びベクトル $B(-x, y)$ があるとき、 $(x-x, y+y)$ を成分にもつようなベクトルは、 $A+B(x-x, y+y)$ で表すことができる。」と定義される。斯く定義されたベクトル加法の幾何学的意味を考へる爲に A を表す有向線分を \overrightarrow{OA} 、 B を表す有向線分を \overrightarrow{OB} とする。 \overrightarrow{OB} を \overrightarrow{OA} に沿ひ、 O が A に一致する迄平行に移動する時、 B 点の到達すべき位置を C とせば (左図参照)、 C の座標は $(x-x, y+y)$ であるから、有向線分 \overrightarrow{OC} がベクトル $A+B$ を表すものであることが理解される。点 C は又 \overrightarrow{OA} を \overrightarrow{OB} に沿ひ、 O が B に一致する迄平行移動する時に、点 A の到達すべき位置とも、 \overrightarrow{OA} 、 \overrightarrow{OB} を二辺とする平行四辺形の第四の頂点とも見做すことが出来る。

【図 10】 Fig. 2

点 A を存在論的認識の原点『現存在』の瞬刻的関與對象たる時間内容を表す質点とせば、 z に対象的なる点 B はその座標成分の性質上時間持續を表す質点と云はれ得る。而して時間的継起は持續における瞬刻的時間内容の多様として規定され得るから、此の事實は図式で示され、点 C はその座標成分 $(x-x, y+y)$ の性質によつて『現存在』のノエシ的関與對象一般を表すものと解せられる。各主体の有する個々の表象座標系へかゝる独自の個別的座標系を人格と称し、其れは世界観及び人生観の基盤でもあるの座標原点たる『現存在』は、吾々は紋上の原理に基づいて別紙第一図及び第二図を制作することが出来る。

第一部・第二章の第一節に相当する図式別紙第一図を基礎として、此の部に相等する別紙第三図が構成され得る。此の図は、第二段、四、に於いて図示された八卦図を基とする易の原理図式と照應し、四千年の歴史を裏打ちとして其の普遍的妥当性を獲取するであらう。

存在学的原理論の図式的操作には、次の如きトポロジーの基礎概念が必要である。

(一)、「包含されること。」

トポロジーは、部分と全体との関係、更には「包含されること」の概念に基礎を置く。一つの点について見れば、その点を「包む」周囲が直ちに問題となる。

(二)、「トポロジー的空間の方程式

A によつて表される無数の点が、 B に「包まれる」とき、 $B \vee A$ は B が A を「包む」ことを表し、 $A+B=B$ は B が質料 (A) 及び形相 (B) に依つて合成されたものの外延的側面であることを表し、 $A \cdot B=A$ は A が合成者の内包的側面であることを表す。それ故、空間の各部分に就いて次の方程式が成立する。

$$A+A=A, A=A \cdot A$$

(三)、「領域に於ける結合

各点が、其れ等を「包む」一定の領域を通路としてもつとき、之等の点は其の領域に於

いて結合してゐるといはれる。左図に就いて言へば、a. 点 $1 \cdot 2 \cdot 3$ は結合してゐる。
b. $5 \cdot 4 \cdot 6 \cdot 2 \cdot 1 \cdot 3$ は各々結合してゐるが、 $5 \cdot 2 \cdot 6 \cdot 1$ 等は結合してゐない。又 $B \cdot C$ の二領域は結合すべき通路としての領域を有たぬから無結合である。c. 無結合。トポロジ的等値とは、領域内の結合の不変化を言ふ。

【図 11】

(四)、領域の開・閉

平面が境界を有するとき、二方向に閉ぢられた領域といふ。面は制限的領域であり、三次元空間は無制限領域であるとも云ふ。

(五) 結合の種類

領域の二つの境界点を結合し、且つ領域の内部に全く横はる道を横断線 (c) と名づける。左図に依れば、c によつて D が D_1 と D_2 の二領域に分割され、 D_1 内に於ける点と D_2 内に於ける点は孤立的に結合する。しかしながら e. 図の如く、領域 E が $n \cdot m$ の二つの閉ぢた境界線より成る環状である時は、c は孤立的結合をおこさない。其の場合 e. 図の如く、c1 を加へれば d. 図と同様の事情になる。d. 図の如き場合を単一結合 e. 図の如き場合を二重結合の領域と言ふ。かくて f. 図の如き場合は四重結合の、g. 図の如き場合は五重結合の領域と云はれるであらう。

【図 12】

【図 13】

【図 14】

(六) 單純結合領域に於ける数学的特質

此の領域の境界は、ジョルダン曲線の性格を有する。一對一の連続せる円の像によつて其の曲線は表はされ、其れ自身に横断することのない閉ぢられた曲線である。其れは平面を内部と外部との二領域に分割するといふ特質を有し、ジョルダン曲線を横断するとき、結合は成立しない。

第二章 存在学的原理論

第一節 範疇論

偉数の範疇論者 N・ハルトマンは、普遍的範疇論の基礎付けを目指す一論文に於いて、「第一哲学の觀念……の要求するところは、『主観——客観』『原理——具体者』なる二對の對立の本来の關係の再興、即ち其等の方向上の交叉、若しくは直交的位置、これである。

意識と対象とは、両者が実際具体者の全然異質的な二類型である以上、各々自身自身の範疇を有たねばならぬ。」と言ひ、又他の論文でも、「範疇圏域は・・・初次的に存在圏域であり得るもので、それが『主観一般』といふ特質を所有する必要は全然ない。問題となるのは、抑々原理の観念性とか實在性とかではなく、唯々その、主観と客観とに對する同一性である。」と謂ふ言葉で同様の趣意を表現してゐる。カントにおいて、先驗的統覚の必然的統一の規則とせられ、N・ハルトマンの所謂『主観一般』の領域に帰せしめられてゐる範疇は、彼が立脚的に主張する如く、「現象へ適用する」と言ふ様な天降りのなものであつてはならぬ。Kategorie“と謂ふ語を始源に遡航して、「裁判」乃至「述語」と謂ふ意味に於いて把へるならば、其處に両つの楔機が透視せられるであらう。一つは裁判の依據すべき法典乃至述語すべき主語であり、他は裁判すべき事件乃至述語内容たる事実である。ジグワルトは、命題に於ける述語の必然性・主語の抽象的形式性に就いて語つてゐる(Logik)が、之は裁判に於ける事件と法典との關係にも類比的に妥当する事柄である。カントの範疇表を注意して觀察し、且深い関心を以て研究した人なら誰でも氣づくことであらうと思ふが、四綱の範疇の第一項(實在性・單一性・可能性・実体性)がすべて上の如き意味に於いて法典的若しくは主語的(心理学的理念の体系が此の第一項の概念のみによつて構成されてゐることに注目すべきである。それは a priori な原理性を指示する)であるのに反して、第二項(否定性)へは主語を得てはじめて表象と成る先驗的對象 X に對應する概念である。カントが此の意味に於いて使用してゐることについては、第二段、二、に於いて述べた)・数多性・現實性・因果性)はすべて事件的乃至述語的(宇宙論的理念の二律背反に於いて、反立はすべて之等の概念に基づいてゐる。其れは對象性を指示する)性格を有してゐる。此處からも推察される様に、第三項(制限・總体性・必然性・相互性)にこそ、Kategorisieren“の成果としての判決乃至命題の性格が托されてゐるのである。此の第三項に其の本質を有し、然も第一・第二項を構造的に含蓄してゐるのが、之等三概念の上位概念たるべき、Kategorie“は、それはカントに於いて性質・分量・様相・關係と体系的に組織せられた。彼が「純粹理性批判」の分析論を其處より展開し其處に集中した斯くの如き範疇表は、純粹理性の「先驗的誤謬推理」及び「二律背反」の批判據点となり、ひいては以後の批判的諸著作の基礎をも成すに至つたのであるが、其れが形式論理学の判断表に基づいて構成されたと謂ふ事實は、彼の体系に於ける『アキレスの踵』として指摘され、其の事は又此の表に對する一般の消極的態度を結果した。然し乍ら極端な場合を考へて、カントの哲学体系を範疇表に對する何等の注目なしに理解せんとする者を見出すならば吾々は問はねばならない、「就職論文に續く約十年の沈黙は、一体何に捧げられてゐたのであるか、彼を『獨断のまどろみからよびさましてくれた』先縦としてあれ程に畏敬したヒューム(カントはヒュームを懷疑論者の代表として批判的見地の下位に組み入れてゐるが、プロレゴメナの序文では其の様な理論上での上位下位を超えた畏敬の念が彼の人間の情感を溢へて述べられてゐる)も、範疇表の構成を抜きにしては如何程の價値を有ち得たであらうか」と。「關係」範疇の第二項『因果性』は、実にヒュームの與へた暗示に

基づいて、範疇表構成の重要な礎石となり、「形而上学が全然斯かる概念のみから成立してゐること」を發見したカントは、就職論文に於いて獲取した素地を、「数学的嚴密性」を以て構成する事が出来た。此處に、「範疇の特別な体系の無い間は避けられ得なかつた」（プロレゴメナ・第二編・三九）理念と悟性概念との混淆は、明晰に其の辨證性を指摘せられ、即ち純粹理性の批判もはじめて可能的となつたのである。『因果性』のみに閉ぢられた視野に『懐疑』の境界を與へて、先天的悟性機能を全般的且体系的に把握することの出来た彼は、今や広大な『批判』の野に驕り出でる。其處では『懐疑』を経て十分に打固められた『獨断』は許容せられ、「学問はつねに獨断的である。」と迄言はれる。『實在性』・『單一性』・『可能性』・『実体性』等の先天的形相観念は、其處に於いてのみはじめて批判的に適正な姿で顕示される。即ち、懐疑の熔爐を経ない其等の概念は、心理学的理念の体系に於いて先驗的誤謬推理を指摘され、「單なる仮象なり。」と十字架に付けられるが、同時に其事自身に依つて『批判』の野に復活の奇蹟を行ふのである。かの『因果性』は、閉ぢた『懐疑』の野に於いて、『否定性』・『数多性』・『現實性』等を引具して現れる。純粹理性の「二律背反」に於ける反定立こそは実に其の閉ぢられた『懐疑』の野で空洞にこだまする彼等の歌声であつた。カントは此の鬼々迫るこだまに魅されはしたが、其の吸ひ込まるゝ思ひを深淵の岩頭に断乎として持ちこたへた。「合理的心理学の完璧な体系」と「二律背反の定立」とへの根強い愛着が其事を完遂せしめたのである。幼時にやさしいお母さんから深く深く植え付けられた「宗教の世界」、就職論文に於いて既に其の結晶軸を迄見透してゐた「可想界」、は前の者と結びつき、冷徹な迄の常識性と生活環境や時代的趨勢に依つて固く築き上げられたコスモポリタニズムとは後の者としてつかり結びついてゐた。青年期に於ける自然科学の精進は、彼自身の言ふ様に、寧ろ此の様な生得的とも言ふべき性向に對する意識しての制禦であつた。

第二節 存在学的位置論

第三回参照。

第三部 存在学的演繹論

存在学的演繹論の解くべき課題は、「如何にして表象と對象との一致は可能なるか、若しくは、主観及び客観の原理的同一性は如何にして可能なるか。」と謂ふことである。しかし其の前に表象と對象、主観と客観との對立は如何にして可能なるか、が問はれなければならぬ。量子力学の理論的素地を確立した「不確定性関係」は、對象への表象の滲透、否主観と客観との不確定性を示しすらしてゐる。又一般に主観と等置される「意識」の中に既に客観性が保持されてゐることをリッケルトは明澄に指摘してゐる。吾々は「主観——客観」、「表象——對象」を、「行為」に依つて性格づけられる主体の、二つの視方向の極限と

して考へるのが最も妥当な見方であらうと思ふ。此處に「行為」を中核とした二つの「転出」が考へられる。斯かる「行為」の根柢把握即ち原理的認識こそは「存在学的原理論」であり、「転出」のそれは新たに「存在学的演繹論」の領野を開く。『ポリス』形成以前の人類は対象への「転出」を、『ポリス』形成期及び継承期の人類は表象への、又『ポリス』破壊、否『コスモポリス』形成期の人類は再び対象への「転出」を行つてゐる。此の事は歴史的思考に屬することであるが「転出」の構造を知るに重要な事柄である。一、三、を（存在学的）客観的演繹、二、を（存在学的）主観的演繹と名付けよう。

言語は純粹なる（存在学的）主観的演繹である。ここでは外界と區別せられた、リッケルトの所謂「精神物理学」主観が基調となつてゐる。多様な身体的感受は、種々なる感覚と情緒、知覚と想念を生み、其等の諸表象は、各々の相関機能を個々例に就いて顕揚する。言語は、かゝる顕揚の記号として各表象機能の屬性を種々の側面より照出するものである。其れ故、言語に依つて表象を類別し、其れに對應する存在者を斯かる類別に従はしめんとするアリストテレススコラの存在論も生じ得る。言語には、感じたこと、考へてゐること、爲したいこと等主観的表象を表出し、其れに依つて同一対象に對しては同様の感じ方・考へ方・行動をするものと考へらえる存在者に自己の表出を傳達し、自己と同一的な状態に誘き入れんとする意図——共感・論證・協同意図——がある。

之に對して客観的演繹たる自然科学的法則は、「精神物理学」主観に對待する空間時間的客観を基調とする。其れは、自然物の凡ゆる作用よりなる現象が人間の心性に壓し與へる型である。其れ故、其の型に即して自然現象を類別し、其れに對應する存在者を斯かる類別に従はしめる実證論が可能となる。主観的演繹に於いては既に述べた如き事情に基いて実念論乃至唯名論が生じるが、此の客観的演繹に於いては先づ主観を非主題的に事象の背面にしりぞけて外的現象を観察し、次いで「人間」と謂ふ外的存在の人類に自己を投入するので、實在論乃至唯物論が生じる。自然科学的法則には、生起した事、生起しつゝある事、生起を予想せられる事等客観的諸事象を正確に表出し、其れを同一與件に對しては同様の現象を惹き起すものと考へられる存在者に適用して其の様な状態に誘き入れんとする意図——実験・実證・実用の意図——がある。

別紙第四図は主観的演繹を、第五図は客観的演繹を、存在学的原理論の二つの「転出」として、存在学的原理図式に従ひ図示したものである。

第一章 先驗的反省

カントは、「純粹理性批判」出版の直後に、マルクス・ヘルツに宛てゝ斯う書き送つてゐる。「私は純粹理性の二律背反といふ標題の下に述べた所のものから始めても差支えなかつたでせう。」と。吾々は此の言葉の有つ内容を究めることによつて、「純粹理性批判」の眞精神を明かにしたいと思ふ。

一
カントに依れば、「論理的假象（誤謬推理の假象）は全く論理的規則に対する注意の不足から生ずるものである。それ故、この場合には注意が鋭くせられるや否や假象は全然消滅する。これに反して、先験的假象は既に発見され、其の架空な性質が先験的批判によつて明瞭に洞察せられても、それにも拘らず終熄しない（例へば『世界は時間上起始を有せねばならぬ』といふ命題による假象の如し）。（B.353）」ここに論理的假象と對置せしめられて先験的假象の例證として挙げられてゐる所のは、まさしくカントによつて純粹理性の二律背反と呼ばれてゐる所に他ならぬ（vgl. Proleg. §51）。

かくの如き先験的假象として二律背反は純粹理性の自然的不可避的弁證性に基くものであつて、「人間の理性に取り去り難く纏綿附着してをり、吾々がその幻影を暴露した後にも尚理性をあざむくことを止めない」（B.354）」ものである。かくて人間理性の所産たる形而上学は、常にこの幻影にわづ

その晩年、ガルヴェに宛てゝ書かれた書簡に依れば、而して批判は形而上学、即ち勝義の哲学、の予備学であつた。批判に於けるカントの「出发点は、神の存在や不死等ではなくして純粹理性の二律背反」であつたことがわかる故に彼にとつて哲学の先決問題は、純粹理性の二律背反、を解決することにあつたのである。

然も吾々には、「解決の鍵が既に与へられてゐる」といはれる。彼によれば「実にそれは、吾々が与へられた凡ゆる対象を二様の概念に従つて——即ち一度は現象として、次には物自体として解しうる点にある（一七八三・八・七 ガルヴェ宛書簡）」のである。それは「同一の意志が現象（可見的行爲）に於ては必然的に自然法則に従ふ限りに於て不自由なものとして、しかし他面、物自体に属して自然法則に拘束されないが故に自由なものとして考へられても、そこに矛盾は生じない（B. XXVII f.）からであらう。しからば、如何にして、吾々は対象をかゝる二様の概念に従つて解し得るのか。

二

私は、反省概念を論じた分析論の附録が此の問に対する基本的解答を蓄へてゐる如くに思ふ。そこに曰く。「概念は、其の客観が何處に、即ち可想体（物自体）として悟性に、又は現象体（現象）として感性に、属するか、といふ顧慮なくしても論理的には比較され得るが、吾々が此の様な概念を以て対象に到達せんとする場合には、それが純粹悟性、又は、感性の何れの認識能力の対象であるべきか、を決定する先験的反省（transzendentaler Überlegung）が先づ必要（B.325f.）」である。と。（括弧内の註は筆者）、之によれば吾々は所謂先験的反省なるものにおいて実に「対象を二様の概念に従つて解し得る」ことが知られる。かくて先験的反省は、純粹理性の二律背反を解く鍵でなければならぬであらう。弁

證論緒言の第一のパラグラフは、この反省の役割を更に広く、先驗的假象一般の摘発者として示してゐる。即ち曰く。「悟性法則のこの一致に於ては一切の眞理性の形式的なるもの (das Formale) が成立する。感能に於ては眞の判断も偽の判断も共に存しない。元来、吾々はこれ等両種の認識源泉以外に如何なる認識源泉をも有せぬであらう。誤謬は感性の悟性に対する不知不識の影響に因つてのみ惹起せられる、即ち斯かる影響に因つて判断の主觀的理由が客觀的理由と合流し、客觀的理由をして其の規定から遠ざからしむるといふ結果を生ずるのである、恰も一つの動かされた物体はそれ自身に於ては常に同一方向に直線的運動を續けるであらうが、他の力が他の方向に向つて同時にそれに働く場合には曲線的運動を爲すに至ると一般である。それ故に、悟性の本来の働きとこれに混入し来る力とを區別せんが爲には、誤れる判断を二つの力の間の対角線と看做し——さうすると二つの力はこの判断を二つの異つた方向に向つて限定し、言はず一つの角を挟むこととなるのであるが——この合成された作用を悟性と感性との単一な作用に分解することが必要である。このことは先驗的反省によつて先天的純粹判断に於て爲されねばならぬ、先驗的反省に依つて各表象に対して、これに適合する認識能力における位置が指定せられ、従つて又感性の悟性に及ぼす影響も識別されうる (B.350f.)」と。(傍点は筆者)

この一聯の言葉は、先驗的反省なるものが「先驗的分析論」の終末に於てその「附録」として説かれながら実は同時に其の事に依つて次に来るべき「先驗的弁證論」の基礎をなすものであることを示すと共に、このことによつて又、反省概念を説いた一章は從來のカント解釈に於けるが如く單にライプニッツの本体論に対する批判的論述に止るものではなくまさに「純粹理性批判」の要諦たることを注意せしむるに足るものと思はれる。この章を熟読すれば、「ライプニッツの教説の各部分に現れてゐる特異性と此の独異な思想法の根本原理とを同時に吾々に向つて明かにする」といふことは、かへつて「反省概念の表」が齎した「予期せざる利益 (Vorteil)」にすぎなかつたのであり (B.326)、カントの眞の意図は「悟性の經驗的使用と先驗的使用との混同に依て生ずる反省概念の多義性」に「欺かれて」 (B.326) 構成された形而上学の典型をライプニッツの本体論 (世界の知性的体系) に見出し、之を手掛りとして先驗的反省の先本体論性を解明せんとする所にあつたものであることが明かとなる。かくて彼は、『現象の知性化』といふライプニッツの誤謬の内因を先驗的反省の缺如といふ点に指摘し (B.327)、「まよしく之が爲に、斯かる概念の多義性といふ人を感じはして誤れる原理を作らしむる原因を闡明するのは、悟性の眞の限界を決定し確實ならしむるに大なる効果を有することである (B.336)」と断定したのである。ここに所謂「悟性の眞の限界を決定し確實ならしむる」ことこそ、実に、数学及び自然科学の基礎を確立すると共に他方道徳及び宗教に独自の領域を指定せんとする「批判」の眞精神ではなかつたらうか。

カントは、先驗的反省を定義して「表象が純粹悟性と感性的直観との何れに属するものとして相互に比較されるかを弁別するはたらしむる (B.317)」とか「何れかの認識能力に対する所与表象の關係の意識 (vgl. B.316, 318)」とか「物の属する認識方法の攻究 (B.318)」と

か云つてゐる。今ここに、「対象ではなく、寧ろ対象一般を吾々が認識する仕方——それが先天的に可能なるべき限りに於て——に關与するところの凡ての認識を私は先驗的と名付ける (B25)」といふ「純粹理性批判」の緒言に於ける有名な言葉が思ひ起されるならば、先驗的方法の体系たる「批判」の眞精神は先驗的反省にひそむといふ極言も一應は許されるであらう。かくて私は、先驗的反省をテーマとする「反省概念の多義性について」といふ章は、批判体系のキーポイントである。と思ふのである。

三

第二章 先驗的定位

哲学は、生の諸契機を抽出しそれを体系的に把握することによつて生の本質を闡明する、といふことに其の根本的な課題を有つものと思はれる。哲学史は、この体系的把握の努力の跡を対立的二領域を根本的に峻別する二世界論の展開に於て示してゐる。カントは、「經驗一般の可能性の制約は同時に經驗の対象の可能性の制約である」といふ斯の有名なコペルニクスの宣言によつて、パルメーニデス以来墨守され来たつた存在 (Sein) と認識 (Erkennen) との二世界論を超剋し、かくて獲約したる一つの世界を再び質料 (Materie) と形相 (Form) との二領域に分割して先驗的二世界論を樹立した。現代の物理学者達のコペルニクスの宇宙観を地盤として建設した荘大な物理的世界像を仰ぎ見つゝ、吾々はカントによつて獲得せられた經驗 (表象) と対象 (存在) との同一性を基礎前提として哲学の本来的課題を果すべき世界定位に従事しようと思ふ。かの物理学者達のためにコペルニクスにおける原初形態がケプレル・ニュートン等によつて数学的に論證されてゐた様に、吾々のためにはカントに於ける經驗と対象との一致といふ革命的提題が既にゲシュタルト心理学・量子力学等によつて其の妥当性を確保せられてゐるのはまことに心強いことである。

(註)

i. ケーラー 「ゲシュタルト心理学」(佐久間譯)

「私の物理的生活体に影響を及ぼす物理的对象は、ある波瀾を生活体内におこさせるが、その終局的結果が直接經驗における私の眼前の『物』なのである。」

「私の物理的生活体内の過程に依存する幾分かは『客観性』の特色をもつが、一方同じ生活体内の他の過程に依存する他種の經驗は『主観的』な特色をもつ。」

「物理的对象の物理的特質を研究する際に用ひられる物理的装置は、私の現実の經驗の『客観的』部分であり、それによる測定の結果は、私の現前の客観的經驗についてなされるに止り、決して物理的出来事そのものについて報告するものではない。」

ii. 石原純 「物理学概論」

「波動方程式は対象が或る場所に存在する確率を規定する波動函数の変化を示すものにならざるから、一つの『予期目録』である。ここでは個々の量の測定によつて対象に夫々或る新しい状態が与へられることになるので、測定と無関係には状態を規定することが出来ない。故に此處に用ひられる空間及び時間形式は吾々の実際上の観測の結果を整理するためのものであつて、現象それ自身を直接に整理するためのものではない。かくて時空形式によつて整理せられた観測結果は、一つの状態即ち対象を指示するのであるが、それは決して現象自体を指示しはしない。このことは量子力学に依つてはじめて闡明せられた観測なるものゝ眞の意味を示すものであり、観測に於て物理学者は対象の客観的状态を測定によつて知るために必ず対象からの作用を判断すべき測定器械を必要とするのであるが、この場合に対象に対する測定器械の反作用が不可避的に行はれ之が対象の状態を変更するのである。即ち測定を行ふことに依つて対象は常に一つの新たな状態に持ち來たされるので、観測者は測定以前の対象の状態を知ることとはできないのである。」

一

存在とは自己の相関者一般を意味する概念である。今、自己を『心的作用の体系的總体』として規定せば、かゝる自己はたゞ表象にのみ関係するが故に (vgl. A.105 「吾々と関はるものはたゞ吾々の表象の多様のみである、表象に對應するかの X 「対象」は吾々のあらゆる表象と異つたものでなければならぬから、吾々にとつては無である。」、存在論は表象以外の何者をもその研究対象とすることはできない。『生の諸契機を抽出してそれを体系的に把握する』といふことは、『表象を其の本質態に於て分析的体系的に把握する』といふことに外ならないのであるから、吾々の従事せんとする研究は、当然存在論といはねばならないであらうが、それはカントによつて獲得された先驗的基礎に立つ以上、決してアリストテレスのスコラ的存在論ではあり得ず、詳しくは先驗的存在論といはねばならない。

(註)

以上に於ける吾々の所論は、存在即表象と考へる点に於て、*esse=percipi* の立場に立脚するバークリーの観念論と混同されるおそれをもつが、吾々はカントの先驗論の立場に立つ以上、「純粹理性批判」に於けるバークリー観念論への駁論の正当性を承認し、従つて又吾々が依り所とするコペルニックス的転回説とバークリー観念論とが決して同一視されるべきでないことを強調する。

カントに依れば、「一切の表象は外物を対象とすると否とに拘らず心性の限定として其れ自身内的状態に属し、そしてこの内的状態は内的直観の形式的制約即ち時間に属するから時間はあらゆる現象一般の先天的制約であつて、たとへ(吾々の心の)内的現象の直接なる制約であるといへまことにそのことによつて間接にまた外的現象の制約である (B.50)。」

故に、「空間はあらゆる外的、直観の根柢に存する必然的表象 (B.39)」たるに止るのに対し、「時間は一切直観の基礎に存する必然的表象 (B.46)」(傍点は筆者)であるが、其等は共に「純粹にして根源的なる根本表象 (A.102)」であり、「様々な先天的総合的認識がそこから汲みとられ得るところの二つの認識源泉 (B.55)」であらねばならない。実に時空性は、吾々の表象の本質に属するものなのである。故にそれは、表象の本質態の先驗的なる攻究を俟つてはじめて体系的に把握され且展開されるべきものであるが、そのことによつてまさに先驗的存在論の基礎を成さねばならないであらう。所で、表象の時空性を表明する時空概念の体系的なる把握と展開とに先行すべき『表象の先驗的なる攻究』は、前章の考察によれば、先驗的反省以外の何者によつてもなされることが出来ないのである。かくて吾々の方法意識は次の如く明確化され得る。『先驗的存在論は、先驗的反省の立場に於て、表象の本質たる時空性をその純粹なる固有性に於て把握し且それを普遍的必然的に性格づけることを基礎として要求する。』と。

二

先驗的反省の視向は、第一に、表象をその『直接態』に於て顕示する。人間の生の直接的にして且具体的なる性格は先づ人間的生の運動として規定せられ、屢々流動を意味する言葉によつて表現せられて来た。古代に於てヘラクレイトスは@.@.@.@.@.@.@.@.@.@と呼び、近くはジェームズが Stream of consciousness と名付け、ベルグソンは と称した。然るに、反省の視向は直にこの直接なる『意識』経験の対象化即ち表象の『間接態』としての『認識』を顕示する。

第二に、直接なる『意識』経験 (Bewußtsein) からは『内容意識』(Inhaltsbewußtsein) と『自己意識』(Selbstbewußtsein)、『認識』(Erkenntnis) からは『注意』(Aufnehmung) と『反省』(Reflexion) なる二契機が抽出せられる。

(註)

『意識』は、内容的多様を一つの生命性をもつて相互に浸透し、いはゞ一つの流れとする。『認識』とは、客体に関係する表象であり、『注意』によつて捉へられた個々の表象が如何にして一つの意識の中に把握されてあるかを省る所の『反省』によつて、多数の客体に共通なる表象たる概念を産出する。

第三に、『意識』作用一般の相関者として、「自己に属する存在 (zuständiges Sein)」といふ特性をもつ『主観』(Subjekt) が、其れの二契機たる『内容意識』及び『自己意識』のに於て『外的なるもの』(das Äußere) といふ特徴をもち、『内容意識』と『注意』との相関者たる存在の『顕在態』(Explizitum) は『質料』(Materie) の名の下に『被限定者』(Bestimmbarkeit) とし、『自己意識』と『反省』との相関者たる存在の『隱在態』

(Implizitum) は『形相』(Form) の名の下に『限定者』(Bestimmung) として特性付けられる。

三

先験的反省は、表象の本質態を、以上の如く『直接態』と『間接態』・『顕在態』と『隠在態』とに於て、体系的に把握し且展開するが、此の事を土台とし、其の上に築かるべき時空概念の体系(一の第二段を参照)は、表象全般に向けられる先験的反省の視向そのもの、特性を、『内的者』・『外的者』・『被限定者』・『限定者』といふ其の相関者との関係に於て把握し、かくて得らるべき反省概念の体系に則つてはじめて展開されうる。

先験的反省の視向は『内的者』即ち『主観』一般に向けられる限りに於て『相次』(Nacheinander) として、殊更に『主観』に於ける『受容性』又は『自発性』に関係せしめられる時には『矛盾』(Widerstreit) 又は『一致』(Einstimmung) として特性づけられる。之に対応して『外的者』即ち『客観』一般に向けられる限りに於て『相並』(Nebeneinander) として、殊更に『客観』に於ける『偶然性』又は『必然性』に関係せしめられる時には『矛盾』(Verschiedenheit) 又は『一様性』(Einerleicheit) として特性づけられる。而して『矛盾』及び『差違性』は『被限定者』即ち『質料』に向けられた夫々内的及び外的なる視向を、又『一致』及び『一様性』は『限定者』即ち『形相』に向けられた夫々内的及び外的なる視向を表明する。かくて、大きくは『相次』と『相並』、更に夫々の二契機としての『矛盾』と『一致』、『差違性』と『一様性』といふ諸概念を以て反省的視向の本質態を体系的に把握し得た吾々は、ここにはじめて時空概念体系の構成素地を見出だすのである。

四

『相次』といふ心性の状態は『時間継起』(Zeitsukzession) を、其れの二契機たる『一致』及び『矛盾』は『時間凝合』(Zeiteinstimmung) 及び『時間内容』(Zeithalt) をその相関者として指示し、それに対して『相並』といふ心性の状態は『時間系列』(Zeitreihe) を、其れの二契機たる『一様性』及び『差違性』は『時間秩序』(Zeitordnung) 及び『時間項』(Zeitglied) を夫々の相関者として指示する。『時間継起』は存在乃至表象の時間性をすべからず表明する概念であつて、『内的者』即ち『主観』の非可逆性を、その二契機たる『時間内容』及び『時間凝合』はその異質的多様性 (heterogene Vieltachheit) 及び強度的単一性 (intensive Einfachheit) をあらはす。次に『時間系列』は時間性をではなくて寧ろ空間性を表明する概念であつて、『外的者』即ち『客観』の可逆性を、その二契機たる『時間項』及び『時間秩序』はその等質的多数性 (homogene Vielheit) 及び延長的統一性 (extensive Einheit) をあらはす。その『直接態』においては『時間凝合』、『間接態』においては『時間秩序』として性格づけられたる『隠在態』は一般的には『持續』(Dauer)

として、之に対して『直接態』においては『時間内容』、『間接態』においては『時間項』として性格づけられたる『顕在態』は一般的には『瞬間』(Moment)としてあらはされる。

(註)

ベルグソン 「時間と自由」 (服部紀譯)

「持續については可能な二つの概念がある。一つはあらゆる混入物のないもの、も一つはひそかに空間觀念が介入するものである。全く純粹な持續は、自我の生きることに身をまかせ、現在と前の諸状態とを分別するのを止める時、意識状態の繼續のとする形である(p.98)。」
「持續のうちでの繼續の順序、(秩序)につき、またこの順序の可逆性について言ふとき、問題となる繼續は・・・ 抜りの混入しない純粹の繼續であるか、それとも分たれ並べられたその幾項かを同時につかむことの出来るやうに空間に展開される繼續であるか。答へは疑ひを容れない。まづ項を区別し次に項の占める位置を比較しないでは、項の間に順序をたてることは出来ない。つまり項は、多数の同時的の別々のものとして知覚される。一言で云へば、項は並べられるのであつて、繼續するものうちに順序がたてられるのは、繼續が同時になつて空間のうちに投寫されるといふことである (p.100)。」

*吾々の分析からしても、時間性が生の直接態の本質であるのに対して空間性がその間接態の本質であることが明かであらう。

五

先驗的反省による斯くの如き時空概念の体系的顯示の可能性は、時空性が表象乃至存在の本質に属するかぎりにおいて、表象乃至存在の本質態が絶対的な内在的聯関をなしてゐることに基くものであらねばならない。かゝる内在的聯関は、一見此の聯関とは没交渉であるかの如く考へられる存在即ち普通に超越者と呼ばれてゐる所のものをもその該聯関内への導入の動機づけといふ仕方ですらに体系的に則つてその位置を指定する。このことは、人間の有限性、言ひ換えれば吾々の經驗が本質的に有限であるためにそれが關係を有ち且相共に或る統一を形成する所の他者を指示するといふこと、に基くのであるが、その有限性は、個性といふ意味において主体的独自性の行爲に於ける自発を予想してのみ、このことを言はしめる充分なる根據となるのである。では所謂超越者は如何様に動機づけられ、且如何様に特性づけられるであらうか。

絶対的な内在的聯関を体系的に表明すべき時空概念(空間概念は、空間が時間の間接態と考へられるかぎりにおいて、時間的表現に従はされねばならなかつたのであるが)は、所謂超越者の該聯関内への導入の動機づけを概念的に表明すべき規準となるであらう。かくて吾々は言ひ得る、『時間内容』は『純粹内容』(reiner Inhalt)即ち内的未顕在態(innere Präplizium)を、『時間項』は『純粹項』(reines Glied)即ち外的未顕在態(äußere Präplizium)を夫々被規定的顕在態(bestimmbare Explizium)の彼方に指示し、『時間

凝合』は『純粹凝合』(reiner Zusammenhalt) 即ち内的絶対隱在態 (innere absolute Implizitum) を、『時間秩序』は『純粹秩序』(reine Ordnung) 即ち外的絶対隱在態 (äußere absolute Implizitum) を夫々相對的隱在態 (relative Implizitum) の彼方に指示する。」¹⁷⁾

第三章 先驗的定位図

カントは「負量の考へを哲学に應用する試み」と題する論文に於て、「数学ではよく知られてゐながら哲学では殆んど使はれてゐない一つ概念を哲学に關聯させて考察し」、そのことに依つて、彼の主著たる「純粹理性批判」の根本的課題をなす『先天的綜合判斷』の原理を記号的に把握してゐる。本来的に有限性に纏綿せられる吾々人間は、神をも摩する崇高な理性認識に於てすら、視象性を其の明證地盤として要求する*。吾々の從事する先驗的存在論の対象たる表象の本質態が、空間的に視象化され且そのものが一定の原理によつて規整せられるためには、それが空間の原理に従つて再構成されねばならない。幾何学は永き歴史の裡に空間原理の深みを驚くべき明晰さを以て照出し、其の最も發展せる体系は斯かる再構成のための樑木を其處から選びとるに何等の躊躇をも与へない。幾何学の前提が空間であるのに対して先驗的存在論の基礎前提は存在乃至表象であるからそのことは比論的にのみ可能なのであるが、此の様にして構成せられた視象の体系は、また比論的には其の空間原理に従ふことが許されるであらう。

*

「書ハ言ヲ盡サズ、言ハ意ヲ盡サズト。然ラバ則チ聖人ノ意ハ、其レ見ルベカラザルカ。聖人象ヲ立テ、以テ意ヲ盡シ、卦ヲ設ケテ以テ情偽ヲ盡シ、辭ヲ繫ケテ以テ其ノ言ヲ盡シ、變ジテ之ヲ通ジ以テ利ヲ盡シ、之ヲ鼓シ之ヲ舞シ以テ神ヲ盡ス。」(繫辭上傳第十二章)

一

先驗的反省の主体は純粹なる先驗的自己であり、その相関者は、既に述べた如く(第二章 三)、『内的者』・『外的者』・『被限定者』・『限定者』なる特性を有つ存在であり、『内的者』及び『外的者』は『主観』及び『客観』といはれ、『被限定者』及び『限定者』は『質料』及び『形相』と名づけられる。換言せば、純粹なる先驗的自己は、『主観』——『客観』・『質料』——『形相』といふ二方向に沿つて拡がりを有つべき本質的可能性を藏する。嚮に「心的作用の体系的總体」として規定せられた自己とは、かゝる拡がりに於て捉へられた所の經驗的自己である。かくて、經驗的自己の内実たる表象の總体は、『主観』——『客観』・『質料』——『形相』といふ二つの軸に沿つて、『直接態』と『間接態』・『顕在態』と『隱在態』とに於て顕示され、いはゞその本質態に迄先驗的還元を施されることができたのである。ここに於て吾々は、表象の本質態を質点の二次元的連續体として規定しよう。

斯くの如く規定せられた表象平面に、『主観性』(y)——『客観性』(y)・『質料性』(x)

——『形相性』(x)を軸とする直交座標系を想像せば、任意の表象乃至存在を代表する点Aには、其の直角座標(x,y)が対応する。かゝる表象空間に於て先驗的自己の遠心性を表すものとして一つのベクトルを考へるとき、それは一つの有向線分PQで表される。平行移動によつてPQと重ね合し得る一群の有向線分は、何れもPQと同一のベクトルを表す。之等の有向線分と同じ向きをもち同じ長さを有つた有向線分OAを、先驗的自己を表す所の座標原点Oを通つて引けば、Aは定点となる。即ち先驗的自己の遠心方向の特性換言せば先驗的反省の特性によつてその相関者たる表象乃至存在の性格が決定せられる。(イ図参照)

【図15】イ図

次にベクトルOAをAで表し、其の成分(点Aの座標)を(x,y)として此の事実をA(x,y)と書表し、OAとy——y軸に関して対稱の関係にあるベクトルOBをBで表し、其の成分を(x,y)として此の事実をB(x,y)と書表せば、ベクトルAとベクトルBとの和はA+B(x,x,y+y)と表すことができる。OBをOAに沿ひOがAに一致する迄平行に移動する時、点Bの到達すべき位置をCとせば、Cの座標は(x,x,y+y)であるから、有向線分OCはベクトルA+Bを表し、点CはOAをOBに沿つてOがBに一致する迄平行移動する時に点Aの到達すべき位置、又はOA,OBを二辺とする平行四辺形の第四頂点と見做され得る。かくて力学的には、OCはOAによつて表される力とOBによつて表される力との合力を示す。(ロ図参照)

【図16】ロ図

二

今、点Aを『矛盾』として特性づけられた先驗的反省の視向の相関者たる『時間内容』を代表する質点とせば、之の対稱点Bは、『一致』として特性づけられる先驗的反省の視向の相関者たる『時間凝合』を代表する質点として規定され(このことは吾々の選定した表象乃至存在座標系の軸の性格とそれからする点A及び点Bの座標が示す意味の決定にもとづくのである)、原点O及びA・Bを三つの頂点とする平行四辺形の第四頂点たる点Cは、その座標(x,x,y+y)に基づいて、「持續的時間凝合に於ける瞬刻的時間内容の多様」として『時間継起』を示すであらう。

斯くの如くして、吾々が前章に於て行つた先驗的定位は次の図の如くに視象化され得るのである。(一図参照)